NJ素流協News
平成21年6月25日
第54号

平成21年6月25日発行・発行所　ノースジャパン素材流通協同組合　〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6（農林会館9階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / http://www.soryukyo.or.jp/index.html

平成二十一年版「森林・林業白書」に見る木材供給～低炭素社会づくりに向けて

平成二十一年版「森林・林業白書」が発刊された。今号のテーマは「低炭素社会を創る森林」である。「低炭素社会」とは「二酸化炭素の排出を最小限に抑え、生活の質的豊かさを実感し、自然と共生する社会」のことだそうである。

昨年、地球温暖化防止に向けた京都議定書に定める「第一約束期間」が始まった。この期間の我が国の温室効果ガス削減目標は、基準年（平成二年）の六％である。この数値には、森林による二酸化炭素吸収量三・八％が含まれている。二〇〇一年の国際会議で、各国の削減目標には「法的拘束力」が与えられることになった。しかし現実には、たとえば我が国の現在の排出量は、基準年の値を上回る水準で推移しているという。目標の達成には、「森林による吸収量」の確保は、もはや必須条件だというのである。

政府は平成二十年七月「低炭素社会づくり行動計画」を閣議決定し、その実現のための具体的な施策を明らかにした。この中で政府は、農山漁村地域を「バイオマス資源（※1）の供給源や森林等の炭素吸収源として、低炭素社会の構築に重要な機能を担っている」とし、間伐等による森林整備や、地域材の住宅等への利用拡大、未利用木質バイオマス資源の利用拡大を進めるとしている。さらに、排出量取引やオフセット・クレジット制度（※2）など新しい制度を導入し、低炭素社会実現へ産業界の貢献を促すとしている。

さて、このテーマはいったん置き、まず白書の「林産物需給と木材産業」から、林業・木材産業を取巻く状況を読んでみよう。

※1　家畜排せつ物や生ゴミ、木くずなどの動植物から生まれた再生可能な有機性資源

※2　温室効果ガスの排出を削減、または吸収する国内事業の効果を公的機関によって認証し、企業等の排出量取引に用いる制度

▽木材需給と価格の動向

平成十九年六月に施行された改正建築基準法の影響で、同年の新設住宅着工戸数は大幅に減少、木材需要量は対前年比で五・一％減の八、二三七万㎥となった。用途別には製材用材、合板用材がそれぞれ三、〇四六万㎥、一、一二六万㎥であった。平成二十年の需要量実績は、年後半の景気後退等によりさらに減少し、八、〇〇〇万㎥を割ると予想されている。

一方供給は、外材が前年比で七・九％減少の六、三七四万㎥だったのに対し、国産材は同五・八％増加して一、八六四万㎥となった。これにより木材自給率は二二・六％となり、平成十七年以降三年連続

の上昇となった。

木材自給率を用途別に見ると、製材用材三九・三％（対前年四・〇ポイント増）、合板用材十四・五％（六・二ポイント増）パルプ・チップ用材十二・六％（〇・四ポイント増）、となり、製材、合板用材の自給率増加が目立った。

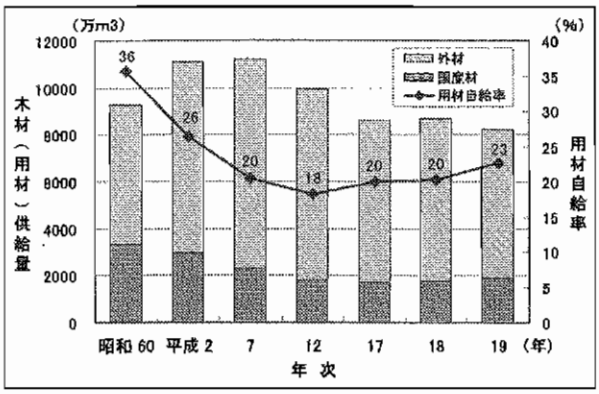


図1　木材供給量（用材）と自給率の推移

世界の木材需要は長期的な増加傾向にあり、中でも著しい経済発展で木材需要を増す中国や、林産業分野の高付加価値化を目論み丸太輸出を制限しているロシアが、少なからぬ影響を与えている。

ロシアの丸太輸出関税引上げ措置により、平成十九年八月以降北洋材輸入量が激減した。税率は平成二十二年一月まで二十五％に据え置かれるものの、日本国内の製材・合板製造業では、国産材用の加工施設を整備し、原料を国産材へ転換する動きが加速している。

また価格の動向を見ると、北洋丸太価格は平成十八年以降急激に上昇、二十年中も高い水準で推移した。一方国産材丸太価格の下落傾向は依然続いている。なおカラマツの価格は、合板用北洋カラマツの代替需要によりやや上昇した。

木材チップ価格は、国産チップでは平成十九年以降上昇の兆しがある。輸入チップ価格は二十年秋以降の円高で下落したが、針葉樹チップは依然国産より高い水準となっている。

▽合板の需給状況

平成十九年の合板供給量は八〇一万㎥で、うち国内生産は四〇〇万立方メートルであった。

合板原料としての国産材利用は、スギ、カラマツを中心に急増した。対前年比四十三％増の一六三万㎥となり、これは五年前の約六倍である。この結果、合板用素材に占める国産材の割合は三十一％となり、前年比九ポイントと大幅な増加となった。また木造住宅建築で、昨今の耐震・耐久性への要求の高まりから、耐震性を高める構造用合板の利用が拡大している。

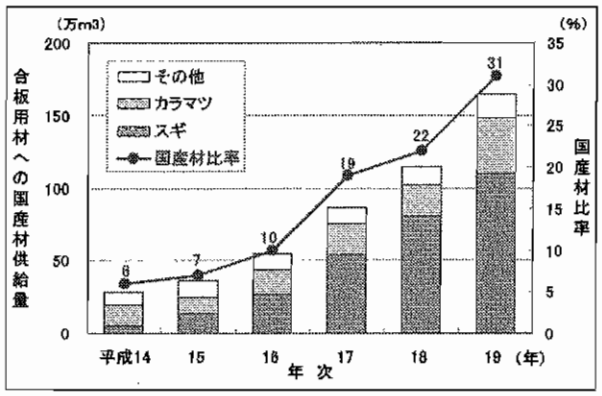


図2　合板用材への国産材供給量と国産材比率の推移

▽生産と流通の高効率化

国内の製材工場や合板・集成材工場の数は、小・中規模工場が減り続ける一方、近年大型工場が増加する傾向がある。また、数では数％に過ぎない大規模工場が、素材消費量全体の五割以上を占め、素材が大規模工場に集中する傾向が進んでいる。

これら大規模工場では、生産性や収益効率を上げるため、大口の取引で安定供給する体制がとられている。また複数の工場がグループとして事業を行い、大規模化を図る取組も見られる。

原木流通においても、素材生産業者や森林組合が主体となって供給量をまとめ、製材工場や合板工場に原木を直送し、流通の効率化を図っている事例がある。

一方供給側の林業でも、施業の集約化や、路網と高性能林業機械を組み合わせた作業システムの導入により、低コスト・高効率の原木供給体制を構築する動きが進んでいる。

―以上、最新の白書から、木材と合板の需給と価格の動向、昨今の林業・木材産業における生産・流通体制の変化を見てきた。この

一、二年の間に、国内外の経済や政策の動向が林業・木材産業に大きな影響を与え、業績を左右させた一方、国産材の利用増加や生産と流通の大規模化など、産業構造を変えるような新たな動きが起こりつつあることが読み取れた。

▽低炭素社会に向けて

政府の策定した「低炭素社会づくり行動計画」は、産業や社会のあり方そのものを変えて地球温暖化防止に寄与しようというものだ。山村での高齢化・過疎化が進み、「低迷」と言われて久しい林業界だが、政府は京都議定書の「約束」を果たすため、林業・木材産業をフルに活用し、排出量削減を実行しようとしている。とすれば、低炭素社会づくりに向けて、今後我々を取巻く状況がさらに変わっていくことは間違いない。世界的な宿題の解決において、我々に対し重要な役割を期待されるであろうし、我々も自らの立場、使命をあらためて考え直すべき時にあるのではないだろうか。

初めて地区別懇談会を開催

六月下旬に当NJ素流協の初めての試みとして、地区別懇談会が開催された。

各会場とも多くの参加者があり、開会にあたり、下山理事長は「平日のしかも晴天の仕事日和に、この懇談会を開催し、仕事を休んで出席いただいていることに若干の心苦しさを覚える。その意味においても有意義な会議にしなければならない。

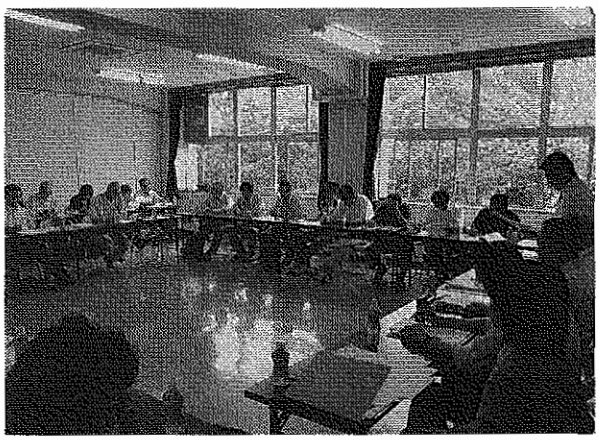
かつては、合板工場見学会を兼ねて意見交換会を開いたこともあるが、このような懇談会形式で開催したのは初めてである。

この会が有効であり、継続すべきであるという意見があれば、今後も開催していきたい。」と挨拶した。

また、県南地区では、大船渡地方振興局農林部　漆原隆一林務課長様、県北地区では宮古地方振興局岩泉林務事務所　高橋壮所長様より、地域の林業情勢を含めたご挨拶をいただいた。

懇談会では、いわゆる団体会員所属の孫会員も参加していることから総会での議決事項や最近の木材需給や木材市況について報告するとともに、平成二十一年度補正予算での「森林整備加速化・林業再生事業」の概要説明をしながら、質疑応答し、また、組合員からの要望についても伺った。

なお、アンケート結果の概要は図のとおりである。



地区	月日	会場	参加者	
			事業体数	人員数
県南地区	6月24日	住田町 農林会館	31	36
県北地区	6月25日	岩泉町 県合同庁舎	30	39
計			61	75

表　懇談会日程と参加者数

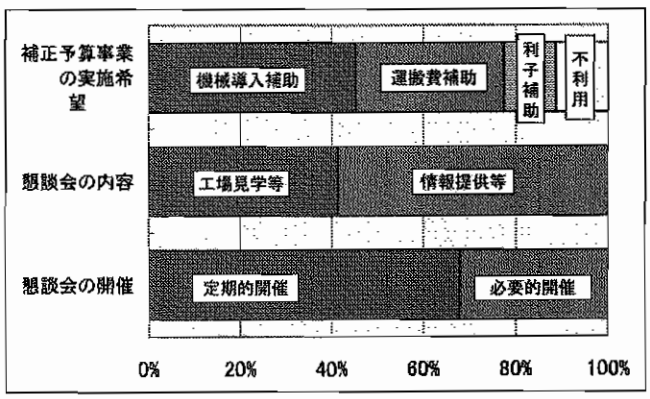


図　アンケート結果

新規組合員紹介

今年1月1日から3月末日までに、次の方々が賛助会員より正組合員へ異動しました。

☆異動した組合員

1住　所　青森県青森市
団体名　青森県森林整備事業協同組合
代　表　理事長　成田一憲
異動日　平成21年1月27日

2住　所　青森県青森市
団体名　青森県国有林材生産協同組合
代　表　理事長　坪　晃
異動日　平成21年2月27日

3住　所　青森県上北郡七戸町
団体名　上北森林組合
代　表　代表理事組合長
小笠原恭裕
異動日　平成21年3月3日

4住　所　青森県青森市
団体名　青森県森林組合連合会
代　表　代表理事会長
本間家大
異動日　平成21年3月12日

5住　所　青森県上北郡七戸町
会社名　㈱金見運輸
代　表　代表取締役　金見一雄
異動日　平成21年3月31日

一葉　広葉樹（9）

▽枝別れの仕方（分枝）

茎や根、葉脈などが枝分かれすることを分枝という。

普通の分枝の方法は、大きく二つに大別される。

一つは頂端の分裂組織が互いに等しく分かれ、それから発達した枝が同じ大きさになる場合で二又分枝といい、主軸のなくなった平等の2枝となる。典型的なものはイチョウやシダ類の葉脈であり、茎ではヤドリギやヒカゲノカズラに見られる。

他の一つは頂端の分裂組織が不平等に分かれ、大きい方は主軸として伸び、小さい方が枝となる場合で単軸分枝という。

これに属する樹種は多く、ミズナラ、オニグルミ、ホオノキ、ハリギリ、イタヤカエデなどの枝である。

単軸分枝の変形したものとして、軸の先端の成長が止まり、代わって側芽が成長して主軸のようになるものを仮軸分枝といい、ジグザグした枝の形となる。

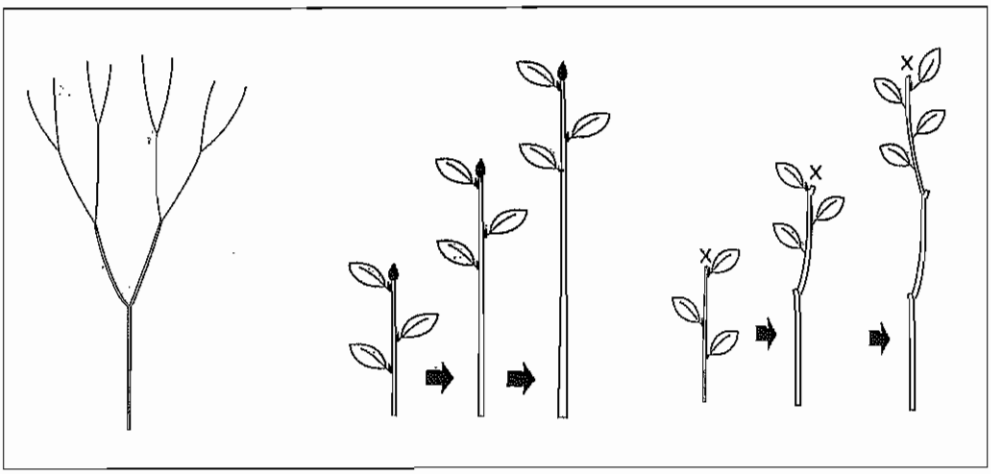


図　分枝の種類（左から二又分枝、単軸分枝、仮軸分枝）

このような仕方をする樹種も多く、シラカンバ、カツラ、キハダ、イヌエンジュ、シナノキ、アサダなどである。

また、同じところから三つ以上の枝が出るものを多軸分枝という。

冗談欄　行動を変えれば、という問題ではない

ある日家に帰ったら、妻が本棚を買ってきて本を並べていた。

東京のある大学が教育研究センターと共同で、子供の学力と保護者の普段の行動との関係を調査した結果が新聞に載っていたのを読んでからの行動である。

家に本がたくさん有る家庭の子供は、国語や算数の成績が良好であるというのである。

また、新聞の政治経済欄を読んでいるとか、パソコンでメールをしている親の子供は成績が良好という。

反対に、テレビのワイドショーやバラエティー番組をよく見たり、スポーツ新聞や女性週刊誌をよく読んでいる親の子供や、パチンコ・競馬・競輪などをしたり、カラオケによく行っている親の子供は成績が劣っているという結果となっている。

そこで、本を並べてからしばらくの間、テレビや女性週刊誌を我慢し、パチンコやカラオケも自粛していた。

しかし、長年の習慣を簡単に変えることは難しく、我慢や自粛も間もなく限界に達したようだ。

今は、子供の学力は親の遺伝で仕方無いとあきらめ、ワイドショーを大いに見、カラオケにも仲間と頻繁に出かけている。

そればかりか、昔みたいに、土曜日登校がまた始まって欲しいものだとさえ言っている。

平成21年5月分の販売実績

1　合板用出荷量を先月と比較すると、スギが約3,150㎥、カラマツが約7,340㎥減少、アカマツは出荷なしで、全体で約10,870㎥と大幅に減少している。また、昨年5月と比較すると、スギが約4,400㎥、カラマツが約2,250㎥、アカマツが約2,430㎥減少し、全体で約9,080㎥と大幅に減少している。工場別では、ホクヨープライウッドが5月の出荷なし、北日本プライウッドが先月比較で約700㎥減少、昨年5月比較で約1,070㎥増大となっている。これら増減の主原因は、工場側の受入調整によると考えられる。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は先月より約350㎥増となっている。

2　その他（合板用以外）の出荷量は先月より約200㎥、昨年5月より約100㎥増加している。

3　今年度の年間計画量に対する5月までの累積出荷量の割合（目標達成率）を16.6%とすると、今月の合板用出荷及び全体出荷はいずれも計画を5%程度下回る進捗状況となっている。

（㎥、%）

樹種	長級	販売先 合板用 ホクヨープライウッド㈱	北日本プライウッド㈱	セイホク㈱、西北プライ㈱	小計	その他	計	累計 合板用	樹種別割合	その他	計
スギ	2.0		1,741		1,741			4,860			
	4.0		1,182		1,182			4,134			
	計		2,923		(1,110) 2,923	375	3,298	(1,489) 8,994	45.3	578	9,572
カラマツ	2.0		878		878			6,096			
	4.0		694		694			4,390			
	計		1,572		(121) 1,572	78	1,650	(240) 10,486	52.8	100	10,586
アカマツ	2.0							367			
	4.0							17			
	計							(384) 384	1.9	0	384
その他針						27	27			74	74
広葉樹						18	18			47	47
合計			4,495		[0] (1,231) 4,495	498	4,993	[0] (2,112) 19,864	100.0	799	20,663
目標達成率								12.0		8.0	11.7
計画量								166,000		10,000	176,000

長級2.0には2.1を含む　（　）はシステム販売取扱量(内数)　［　］はストックヤードからの出荷量(内数)

落穂拾い

落穂拾い子が若かりし頃、それもかれこれ五十五年前に遡るのであるが、尾崎士郎著の『人生劇場』を愛読した時期があった。この小説を題材としたもので、歌手・村田英雄の大ヒット曲である「人生劇場」や今は亡き大スター・鶴田浩二が映画「人生劇場」で〝飛車角〟を演じたのを懐かしく思い出す人は今やほとんどいないかも知れない。

さて、この小説の中の主人公は「青成瓢吉」であるが、この瓢吉が上京して早稲田大学（当時はまだ専門学校だったが）に学んでいる時の友人の一人に新海一八という学生がいた。この彼がある時、〝わが胸の　燃ゆる思ひに　くらぶれば　煙はうすし桜島山〟という和歌（うた）を吟ずるのである。この小説を読んで以来落穂拾い子は、この和歌が妙に気に入って時々思い出しては口ずさんでいたのだが、誰の作なのかわからずにずーっと気に掛かっていたのである。それが最近になって和歌の作者がわかったのである。この作者については次号の「落穂拾い」欄において書こうと思っている。

小説・「人生劇場」に話を戻すが、新海一八が「わが胸の・・・」を歌った場面は、瓢吉や一八たちがよく飲みに行く料理屋「柳水亭」で働く〝お袖〟という佳人がいるのであるが、新海一八が彼女に熱い思いを寄せていたのである。ところが、お袖さんは瓢吉に惚れており、それを知った九州男児・新海一八はきっぱりとお袖さんを諦めると宣言し、その時に吟じた失恋の思いをこめた歌なのである。

ところで、先に書いた村田英雄の歌「人生劇場」は今も巷間においてよく歌われているのだが、もう一つ、名も知られぬ「人生劇場の唄」があるのである。その歌詞を記すので、誰かこの唄の作詞家、作曲家、歌手を知っていたら教えてくれないだろうか。

〈人生劇場の唄〉

(一)男というもの変な奴
　愛していないんじゃないけれど
　俺は嫌いと言っちまう
　あいつなんかもそうなんだ
　嗚呼　人生劇場だ

(二)女は優しくあるものと
　女房になってもならいでも
　今宵　青成瓢吉が
　南部坂などひとくさり
　嗚呼　人生劇場だ

(三)飛車角兄貴じゃないけれど
　ぱっと開いてぱっと散る
　それが男の行く道と
　分ってくれよと分らせる
　嗚呼　人生劇場だ